

散策する際の注意

- 山城は多くが私有地です。ゴミは必ず持ち帰ってください。
- 見学の際に、堀や土塁などの遺構を壊さないように注意してください。
- 道中には険しい箇所があります。十分な体調のもと天候や装備(トレッキングや軽登山の装備)を考えて歩いてください。
- むやみに道から外れることは、足を滑らすなど危険が伴うとともに、周囲の植生を傷つけることになるので、おやめください。
- 野生動物や危険な虫など(スズメバチ・マダニ・ヤマビル・イノシシ・クマなど)に対して、事前対策と現地での十分な注意をお願いします。
- 山中での火器類の使用は禁止されています。山火事の危険がある行為(タバコの吸い殻を捨てる行為など)は絶対にしないでください。

せきがはら史跡ガイド

希望の時間やコースに合わせて、玉城のほか関ヶ原の名所や古跡を歩いて案内します。初めての関ヶ原訪問の際には特におすすめです。
【料金】詳しくは、関ヶ原観光情報ホームページをご覧ください。



関ヶ原観光情報
ホームページ



せきがはら史跡ガイド
予約サイト

【申込方法】上記QRコードを読み取り、予約サイトから申し込むか、申込用紙をHPからダウンロード、若しくはFAXにて取り寄せ、2週間前までにお申し込みください。

【電話】せきがはら史跡ガイド事務局
☎0584-43-1139



お問い合わせ 関ヶ原町地域振興課

〒503-1592 岐阜県不破郡関ヶ原町大字関ヶ原894-38
電話番号/0584-43-1112 FAX/0584-43-2120
E-mail/chiikishinko@town.sekigahara.gifu.jp

玉城に関して



岐阜県関ヶ原町

玉城
Tamajo
玉城

散策マップ



玉城全景

関ヶ原駅前観光交流館、岐阜関ヶ原古戦場記念館でレンタサイクルを借りることができます。



玉城へのアクセス

【車】関ヶ原により城山遊歩道入口まで10分
【徒歩】関ヶ原駅から城山遊歩道入口まで徒歩で50分
※遊歩道入口に駐車場はありません。

周辺マップ

玉城
Tamajo

玉城の歴史

玉城は、近江と美濃の国境上の標高307.6mの城山頂上部に位置し、東山道と北国街道(北国脇往還)の両方を押さえる要衝に位置しています。『美濃古城史』には南北朝期の時代に、佐竹義春が足利尊氏に追われて立て籠もったと伝わるほか、垂井町『岩手明泉寺記録』には「玉城兵六兵衛弘治年中より岩手竹中家家臣杉山内蔵之介」と記録が残りますが、文献資料においては築城時期も含めて、詳細がはつきりしません。

関ヶ原町歴史民俗学習館所蔵の『御合戦御備絵図』には(天正年中浅井家出張跡)と記載があり、付近の松尾山城や長比城などとともに利用された可能性も否定はできません。なお、遊歩道から山頂部にかけては、大正5(1916)年に陸軍により設置された玉の火薬庫(通称)のコノナート柱や鉄条網が残ります。



関ヶ原町歴史民俗学習館御合戦御備絵図 江戸時代
[玉城山 天正年中 浅井家出張跡]と記載あり



③北西側 帯曲輪



④北西側 堅堀群の1つ



⑤西側 大堀切



①山頂部 曲輪



②山頂部 曲輪

山頂には東西200mほどの長大な曲輪があり、西側を巨大な堀切により切断し、その北側を城域としています。虎口は確認できません。北西側には帯曲輪も伴っていますが、どちらの曲輪も削平が甘く、戦国期前半以前の様相を呈しています。

近江側(西側)の防御を意識した縄張となっていることから、美濃側の手で築かれた可能性が高いといえます。東西の両斜面には連続堅堀群が残る、特に西側の未削平の帯曲輪には土塁を伴う堅堀を規則的に配置しています。戦国期の後半に地元領主竹中氏が改修したのではないかと考えられています。

南北朝期から戦国時代後期まで使用された時期差を確認できる、特徴的な山城です。

玉城の歴史

玉城は、近江と美濃の国境上の標高307.6mの城山頂上部に位置し、東山道と北国街道(北国脇往還)の両方を押さえる要衝に位置しています。『美濃古城史』には南北朝の時代に、佐竹義春が足利尊氏に追われて立て籠もったと伝わるほか、垂井町『岩手明泉寺記録』には「玉城浜六兵衛弘治年中より岩手竹中家臣杉山内蔵之介」と記録が残りますが、文献資料においては築城時期も含めて、詳細がはっきりしません。

関ヶ原町歴史民俗学習館所蔵の『御合戦御備絵図』には「天正年中浅井家出張跡」と記載があり、付近の松尾山城や長比城などとともに利用された可能性も否定はできません。なお、遊歩道から山頂部にかけては、大正5(1916)年に陸軍により設置された玉の火薬庫(通称)のコンクリート柱や鉄条網が残ります。



③北西側 帯曲輪



④北西側 堅堀群の1つ



⑤西側 大堀切

関ヶ原町歴史民俗学習館御合戦御備絵図 江戸時代
「玉城山 天正年中 浅井家出張跡」と記載あり

①山頂部 曲輪



②山頂部 曲輪

山頂には東西200mほどの長大な曲輪があり、西側を巨大な堀切により切断し、その北側を城域としています。虎口は確認できません。北西側には帯曲輪も伴っていますが、どちらの曲輪も削平が甘く、戦国期前半以前の様相を呈しています。

近江側(西側)の防御を意識した縄張となっていることから、美濃側の手で築かれた可能性が高いといえます。東西の両斜面には連続堅堀群が残り、特に西側の未削平の帯曲輪には土塁を伴う堅堀を規則的に配置しています。戦国期の後半に地元領主竹中氏が改修したのではないかと考えられています。

南北朝期から戦国時代後期まで使用された時期差を確認できる、特徴的な山城です。